Guò zé wù dàn gǎi
过 则 勿 惮 改

過てば改るに憚る勿れ〈学而第一〉

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

過ちを犯したら改めることをためらってはいけない。これがこの表題の意味です。孔子の考えからすれば、キリストの言うように人はみな生まれながらにして罪を背負っている、というわけではありません。したがって罪を懺悔する必要もありません。しかし人間は、時として過ちを犯すものである、何びともこの事実から目をそらすことはできない、これが孔子の考えの方の前提になっています。ではどうすればいいのか。過ちを犯したら改めればよい、ということになります。そして過ちを二度と繰り返さないようにする。できればそれに越したことはないのですが、そう簡単にいかないのが人間です。

孔子が最も期待していた弟子の一人に顔回という人がいましたが、不幸にも若くして亡くなってしまいました。その時、孔子を「噫！天喪予！Yī! Tiān sàng yǔ!」(あゝ、天予を喪せり)〈先進第十一〉と嘆かせたほどの人物でした。孔子はこの人物のことを「不弐过bú èr guò」(過ちを弐せず)〈雍也第六〉と言ってほめています。最高と認める弟子をこのように評しているということは、普通の人ならば、過ちを繰り返すのは当たり前、ということになります。過ちを繰り返さないということはあくまで努力目標です。肝心なのは、それでもなお犯してしまった過ちを改めることができるかどうかということです。

孔子は次のようにも言っています。「过而不改，是谓过矣。Guò ér bù gǎi ,shì wèi guò yǐ。」

(過ちて改めざる、是を過ちと謂う)〈衛霊公第十五〉。人が過ちから逃れられない存在である以上、過ちを犯すこと自体はやむを得ない。しかしその過ちを改めることができないならば、それこそが過ちである、ということです。また更に次のようにも言っています。「人之过也，各于其党。观过斯知仁矣。Rén zhī guò yě, gè yú qí dǎng。Guān guò sī zhī rén yǐ。」(人の過つや、各々其の党に於いてす。過ちを観て斯に仁を知る)〈里仁第四〉。過ちは単独で起こるのではなく、それぞれの人間関係の中で発生する。したがって、その人の過ちを観察すればその人の仁徳のあり方がわかる、ということ、つまり人がどういう過ちを犯し、それにどう対処したかによって、その人の価値がわかるというわけです。

さて、以上のような孔子の考えを支えた基本精神とはどんなものだったのでしょうか。「一言にして終身これを行うもの有りや」という弟子の問いに、孔子は「其恕乎！Qí shù hū!」(其れ恕か)〈衛霊公第十五〉と答えています。「恕」とは「ゆるす」という意味です。これが孔子の基本精神です。一方に過ちを「恕す」広い心がなければ、「改める」心も宙に浮いてしまいます。ここに孔子の心の広さ、温かさを見ることができます。

(わんりぃ「中国語で読む漢詩の会・講師)